

「めだか大學通信」 3号

2012/03～04

2号で北田耕也氏の著書から、「生命記憶」という言葉を頂いて、各グループで話し合ってきました。今日はそれにつながるものとして、画家・司修氏の「私を捉えた宮沢賢治」というラジオ深夜便の録音の一節をのせたいと思います。

送ってくださったのは、私の友人である群馬の料理人、寺田肇さん。職業は違っても良い友人として、いろいろの意見やテープ・本などをやりとりしてきました。「生命記憶」に足してこれからの私たちの話し合いの材料としたいと思います。

㊦ 私は、人間は動物と話したり、樹や花やいろんなものと話出来ると聞いて、そんなことはないと思ってきましたが、人間はそれを願う人にとってそれが可能になるんですね。つまり、「この樹と話したい」とずっと思い続けることが出来たら、樹は黙ったままだけど、その樹にずっと話しかけていく人があるとしたら、その樹がある日答えてくれる、と言うことがいつか真実になっていると思うんです。

(中略) 人間の思い続ける中にある「あり得ないこと」が起こってくる。人間は心の中に「あり得ないこと」をいっぱい秘めていると思うんですね。「あり得ないものだらけ」のものが「心」と言ってもいいくらい。

生きている苦しみとか喜びとかを、みんなわからないまんまで生きている、僕はこれは「人間の謎」だと思うんですよね。その一人ひとりが持つ、一人ひとりにしか宿らない謎とでもいいでしょうか。その謎を解いていくのが(不明)なんでしょう。その感覚は、人間すべてにあると思いますよ。その大事な感覚というの、耳で理解できたり鼻で理解できたり、理解するものをたくさん詰め込んでいるが、それを余計なもの、アテにならないものとして、少しずつ外されていってしまいに消えてしまう。幼い頃誰でも絵を描いていたが、だんだん描かなくなっているのに似ていると思うのです。

アナウンサー それはだんだん知恵がついて来たり、いろんな情報だったり理屈を考えるようになると、これは理屈に合わないとか、あるはずがないという考えで排除していくし、どんどん人工的なものに囲まれて行けば、その感覚は発揮しにくい…」

㊦ 幼い頃からため込んだ「訳のわからない心」が一番謎であって、しかし一番自分らしい何かを秘めていて、それをうまく引きだせれば自分らしい生き方が出来る、という部分のように思うんです。(後略)

●1号にも書きましたが、哲学者だった福田定良氏から「生き方を学ぶものが哲学、哲学とは考えること、そして考えるとは話し合うことだ」と教えられました。

良いことも悪いことも、わからないことも、わかったことも、自分だけの思いではなく話し合うことで理解を深め、一緒に生きていく力をもらうのです。

2号の「生命記憶」3号の「わけのわからない心というものが、一番自分らしいものを秘めている…」など、まるで「音の世界」を見るような感じではありませんか。自分自身の事としてみんなで話しあいたいですね。

「つくり小屋」3／4

★細田さん・3月11日に、国分寺で行われるうたの集いに、主催の方からその日を記念するものをと依頼されて、急遽作ったのが『福島を遠く離れて』です。

二回の補講で頑張りました。「つくり小屋」みんなで歌って、みんなで納得して送り出した作品ですが、当日の様子は「うた小屋」のところで紹介します。

★稲川さんは先月から持ち越した『じいちゃん』ができあがりしました。これも「うた小屋」のところを見てください。

★今井さんはここ数ヶ月、初めて知った関東大震災の時の「日本の官憲と庶民も加わった朝鮮人虐殺」をテーマにした詞に取り組んできましたが、みんなの意見を少しづつ入れながら、だんだんシンプルなものに変わってきて、曲もつき始めたのですが、再度、詞の方にみんなの意見が出て、また継続することになりました。私は曲も同時進行をしてみたらとアドバイスしました。

★三宅さんからは『追憶のいしのまき』から「祭り日」四連「あの人は遠ざかり行く」三連計七連の詞と曲が出ましたが、時間がなくなったことと、アクセントを直すことしか出来ませんでした。みんなで勉強をかねて、詩を読みながらアクセントを確かめる作業をしました。

私は家に帰ってから、どうも三宅さんは高低アクセントだけでなく、強弱アクセントが混ざっているのではないかと気がつき、大いに狼狽しました。このことで、安達さんもと話し合ってみましたが、そのことは「つくり小屋」当日お話しします。

●こういう所で時間切れとなり、小池さんの『ふるさとで私の春が始まる』が出来ていたことをすっかり忘れてしまいました。小池さん、ごめんなさい。

「うた小屋」 3 / 16

●先月に引き続き「笠木講座修了コンサート」の練習です。

★小須田さん『小海小学校』

練習は大変活き活きと進みましたが、なぜかみんな、歌うたび、小須田さんが何かしゃべるたび、笑い転げてしまいました。理由はよくわかりませんが

みんな楽しかったのは事実です。

キーはE♭・一番は小須田さんのソロ・二番はみんなで・三番は小須田さん、そしてみんなのリフレインときめました。

★小池さん『ふるさとで私の春は始まる』

「つくり小屋」で忘れていたので、ここで初めてみんなで歌いました。曲は『ばば子守唄』と同じにしてもらったので、みんなすぐ歌えました。子守唄同様良い感じになり、歌い方も前半は小池さんのソロ、後半はみんなで、そしてラストにもう一度一行小池さんのソロを入れることで落ち着きました。音をもう少し上げては、という意見も出ました。

★細田さん『そうは思っただけのもの』

内容に反してソフトに歌う細田さんは良い感じなのですが、リフレインはしっかりとリアルに歌いたいのので、その練習が大部分でした。一つの曲を対照的に表現することによって、歌の意味が深く伝わるのではないかと思います。

★斉藤さん『大根一本』

おさらいです。生活感が出る歌似したいので、それに終始しました。後で思いましたが、これは斉藤さんのソフトな声にみんながやや影響されるので、最初からみんなで歌った方がいいのかな、と。現場で検討しましょう。

★村上さん『うれしかった』

これもおさらいです。これからすべての今日に渡って、なんべんも時間の許す限り繰り返して歌っておきたいと思います。

今日は感想のリズムを何小節ときめないで、どこからでもいい、ということにしました。

●さて今月も自分たちの歌を持って出演するという機会に恵まれました。その報告を当事者に書いてもらいましたので紹介します。

細田さん・斉藤さん・稲川さんが、3月11日のコンサートに出演しました。参加した山本坦さんと共に感想を書いてもらいました。

「東日本大震災から一年 東北へ思いを寄せるコンサート」の報告

細田伸昭

東日本大震災からちょうど一年になる3月11日に上記のコンサートを行いました。主催は私もメンバーの一人である「くらしうた研究会」です。

コンサートの中心になった歌は、「つくり小屋」で生まれた斎藤さんの「祈り」と私の「3月11日に思う」の2曲です。これに笠木さんの「あなたが夜明けを・・・」や「くらしうた」で作ってきた曲など7曲を歌いました。斎藤さんや稲川さんは「友情出演」してくれ、「祈り」をしみじみと歌い上げてくれました。

コンサートは毎月開いている「うたごえ喫茶<杜甫>」に続けて開いたのですが、<杜甫>の参加者約30名がそのまま残り、さらに20名ほどが加わり、50名程の参加者で、いいコンサートになったと思います。「つくり小屋」の山本さん、小関さん、今井さんも来てくれました。ありがとうございました。

私たちの表現を、こうしたコンサートなどを通して手渡していくことは、大切なことなのだと思っております。

稲川恵子

3月11日に、国分寺にある「学びの広場」に歌いに行きました。

学びの広場は不登校の子どもたちや知的障害をもった若者たちの学習指導などの活動を25年もされているところです。

代表の加藤正文さんが谷保在住で、私の勤めている法人とも昔から繋がりがあります。

第2日曜日の恒例の歌声喫茶活動の後に、3・11から一年ということで、細田さんもメンバーである「くらしうた研究会」のコンサートが行われました。

その中で細田さんの「福島から遠く離れて」と斎藤さんの「祈り」を歌いました。

どちらもこの会にぴったりの歌でした。

稲川博己さんもギターで参加してくれて、つくり小屋からも私の職場からもお客さんが来てくれました。あたたかな場になって良かったです。

「じいちゃんの唄」がようやく形になりました。

自分の作った歌はやはりどこかで「出しているのかな？」という思いが付きまといまいます。

たとえば斎藤さんの「祈り」だとわりとスパッと入れるのに不思議です。

これからどんな風に歌いたいのか、どこで歌いたいのか練っていきます。

そして、今はまだ小さいですが、歌のグループをひとつ作りました。「金平糖」
こんぺいとうと名前をつけました。

今一緒に活動している人たちと歌い始めています。

先週の土曜日も、地元の教会での分かち合いの会と夜からの会議の間に一時間
程の歌の時間を持ちました。もっかのお気に入り「一粒の涙」「おいで一緒に」
「一本の樹」です。

「一粒の涙」を路上のおっさんやアル中のおっさんたちに歌って聴かせる（一
緒に歌う）のがまずは目標です。

山本 坦

ここに参加した細田氏・斉藤氏の二作品は、問題の内容を捉えかつ親しみがあ
り何よりも生活があり、受け手の感銘も本物だったと思う。草創期の「うたご
え」もこういうもの…聞かせるという意識抜きで、自分の歌いたい歌が、皆も
歌いたい歌である状況…が、復活の可能性を含んで存在できることを知ったこ
とが、私にとっての収穫の喜びだった。

●このほかに3月13日、浦安の日の出公民館で、先月のテーマと同じ「子育て
支援」の岡田の講座に、小池さん・斉藤さんが再び参加しました。震災の液状化
現象のまっただ中にある高層団地に囲まれた公民館で、三歳児を持つ若い母親
たちが対象でしたが、そのまた母親に当たる小池・斉藤さんの歌は、今回もまこ
とに素直に受け入れられ、また、二人とも素直にしっかりと、自分たちの気持
ちや歌ってもらったお礼を伝える様子は中々うれしいものがありました。関わ
ってくださった浦安の公民館、尾木雅子さんと「浦安お話の会」のみなさんに
感謝です。（岡田）

「すみれ分教場」3／14

いつも沸騰しているような「すみれ」なのですが、今日はまた独特の盛り上
がりがありました。中村由紀男さんの、新しい、というかほんとうにみんなが
待っていた第一作が出来た日なのでした。この誕生のドラマを由紀男さんは
こう書いています。

中村由紀男

生まれて初めて、子守唄なるものを創りました。

子どもたちが小さい頃、誕生日プレゼントの代わりにプライベートソングを創
ったことが何回かあり、それらもシンプルなものでしたが、今回のように民謡
音階で、たった4つの音だけで創ったのも初めてです。

でき上がった最初はこんなものでいいのかな？と思いましたが、何回か歌って

みると、子守唄としてはなかなかいいかな？とも思います。

実際に孫の可夢生をおんぶして歌ってみると果たしてどうなるのでしょうか？なにしろ耳の聞こえない子ですから。

この歌ができ上がるまで、知る人ぞ知る、難産でした。最初は脱原発の気持ちとからめて詞を創ったのですが、すみれ分教室のメンバーから何度か作り直しを要求？され、やっとメンバーからの賞賛の声が上がるまでになった詞に曲をつけて2回目、とうとう岡田さんがしびれを切らして？「あなた、これはこれで置いといて、カムイ君に焦点を絞って、全く別のものを創りなさい！」「今日の夕方、お宅へ寄ってもいいわ。」っていう電話が。僕は「うーん、それって、最初からやり直しじゃないですか！」と渋ったものの、カムイに絞った詞を創ってみたら、意外とすぐできちゃった。これを電話で聞いた岡田さんは、この詞には絶賛！？し、夕方本当に乗り込んできた。そして曲もすぐ創ることになって、その夜のうちにできちゃったのです。

民謡音階で創ることにまだ慣れない僕ですので、果たして次はどうなることやら？

●というわけですが、まだご本人に確とした自覚がないので、まだまだサンバとしたら目が離せません。でもこれが自分の「生命記憶」に触れる第一歩だと思うのですが…。

このほか笠木講座終了コンサートに参加する船岡さんの曲作りに、みんなで寄ってたかって口出しし、私としてはサンバが多いのは心強いのです。そしてできあがる寸前まで来ました。亡くなったお母さんに「ありがとう」と「ごめんなさい」をいう歌です。

後は中村京子さんや村上さんの曲をおさらいして、いい一夜となりました。

「にんじん畑」 3 / 15

●しばらくケガでお休みしていた渡辺ミヨ子さんが、やっと回復して、四人のにんじんが揃い、私もやっと落ち着きました。私の機嫌が悪かったので、みんなほっとしたことでしょう。自分でも時々説明のつかないイライラに巻きこまれて、みんなに迷惑をかけます。ごめんなさい。

早速ミヨちゃんと一緒に出る笠木講座の日の練習に入りました。『イロリの赤い火』のリフレインです。

それぞれの歌も、ていねいに何度も歌いました。その人の歌を歌うことでその人の何かとすごく近くなれる…そんな気持ちになるのも不思議です。

上原さんが前に作った『ふるさとの川』の二番を作ってきました。ふるさとをテーマにしたことで、どんどん何か思い出されてくるようです。同じ

節でも、静かな情景と動きのある情景では、曲の感じ方も変わって、楽しみ方が倍になるのです。

「つくり小屋補講」 3 / 2 2

●「つくり小屋は人数が多いので、月一度清瀬の斉藤さんのところで補講をします。昼二時頃から夕食を挟んでより九時頃まで（それぞれ来られる時間が違うので）やります。長丁場だけれどなぜか疲れません。生まれ出るものに力をもらうのでしょうか。今月の様子を、みやけしゅうぎさんにレポートしていただきました。

「楽しく有益な補講」 みやけしゅうぎ

3月22日の補講で斉藤枝さん宅に集まった受講生は、小池久美子さん、山田三重子さん、小林千賀子さん、みやけで、斉藤さんも含めて5人です。

この日は出来たばかりの小池さんの『ふるさとで私の春が始まる』と『お父さんに』、山田さんの『秋月』をみんなで歌い、小林さんの『やまぼうし』の歌詞についても、みんなでは話し合いました。

小池さんの『ふるさと～』は、山菜や花があふれる故郷の春を歌ったものです。全身で感じた春が明るく表現されていました。『お父さんに』はシリーズの第一作。二人の子が父の急逝にめげず成長した喜びを、亡きご主人に報告した歌です。家族の温もりをしつとりと感じさせる歌でした。

山田さんの『秋月』は四部作の④。秋の満月の日に、同胞のいる故郷に帰り、祖霊に挨拶する夫。その背に朝鮮民族の生きた伝統を見たという歌です。濃密な内容が平易に歌われていて、良い歌だと思いました。この歌を含む四部作の背景は後日、散文の形で書かれることをみんなで進めました。

小林さんの『やまぼうし』は霧の晴れた谷間を埋めるやまぼうしの白い花を、亡き姉と一緒に見たかったという歌詞。小林さんが抱く美しいイメージが生きるよう、みんなで助言しました。

この日の補講は岡田さんの話（少人数で聞くとはいさな）を始め、とても充実したものでした。最後にみやけが提出した「追憶の『いしのまき』」のこと。

岡田さんはこれにふれる中で、『歌』をうたってみたら…といいました。『歌』とは私が作った歌誌に岡田さんが曲をつけた例の『歌』のことです。

わいてくる向こうから 風のうた広がってくる
うつくしい雲のように この街へ広がってくる

私は小声で歌いましたが、なぜ歌ったかという、この歌詞を作ったときのことを忘れないよう岡田さんが望んだからです。（註岡田・5年前の調布の笠木透コンサートの時、新潟・東京の両クッキングハウスの歌を聴いた時のこと）歌

は作るものでなく、感動によって生まれるもの、生み出すもの、と岡田さんは言いたかった。それで私は提出した作品を破棄し、新しい歌を作ることにしました。

私にはもう一つ、大事なことがあります。日本語の歌は、日本語のアクセントに基づいてつくるもの。石巻弁が抜けない私は、作った歌詞の一語一語を「共通語」の高低アクセントに合わせて直すのですが、アクセント辞典を見てもうまく行きません。というのは、言葉のアクセントは他の言葉とつなげたとき微妙に動くものらしく、それがうまくつかめないのです。ところが、そこに一つ新しい問題が出されました。

岡田さんは、私が使う石巻弁は高低アクセントだけでなく、強弱アクセントもはいるのではないかというのです。これには驚きましたがよくわからなかったのでボーッとした状態で終わりました。ご馳走になった甘酒のせいかもしれません。